

レチフ・ド・ラ・ブルトンヌの父親像

—『ムッシュー・ニコラ』における幼少年期をめぐる—

井 関 麻 帆*

はじめに

フランス革命へと向かう激動の時代、「父親」とはどのような存在だったのだろうか。フィリップ・アリエスが『子供の誕生』で、18世紀フランスにおける「近代的家族の誕生」を論じているように¹、家族の概念は社会の変動とともに変化していく。これにともない、家族ひいては社会から求められる「父親」も変容していくと考えられる。

本稿は、革命期を生きた大衆作家²ニコラ＝エドム・レチフ・ド・ラ・ブルトンヌ (Nicolas-Edme Rétif de La Bretonne, 1734-1806) の自伝『ムッシュー・ニコラ』(1794-97年)に登場する「父親」の分析から、「近代的家族の誕生」に向かう時代のなかで描かれる父親像を考察するものである。

1734年、フランスのブルゴーニュ地方に位置するサシー村で農家の息子として生まれたレチフは、神学校で教育を受けた後、印刷工を経て作家となった。当時の常識からすると、農民出身の作家は極めて異例である。到底、知識

* 福岡大学人文学部講師

¹ フィリップ・アリエス、『子供の誕生 アンシャン・レジーム期の子供と家族生活』、杉山光信・杉山恵美子訳、みすず書房、1980年。

² ジゼル・ベルクマンは、レチフを「啓蒙主義の転換期にいた多産作家」と定義している。Gisèle Berkman, « Énonciations de la vérité aux marges des Lumières », in *Les marges des Lumières françaises (1750-1789)*, édition publiée sous la direction de Didier Masseau, Genève, Droz, 2004, p. 45.

人とは無縁であったが、それゆえレチフは独自の世界観を作り上げ、大衆作家として成功を収めるのであった。

このような大衆作家レチフに関する研究は、それほど多くないのが現状である。わけても筆者が関心を寄せる父親像については、これまであまり注目されてこなかった。しかしながら、近年一貫してレチフの父親像を考察している大場静枝は、レチフの作品には作者自身の父親像が色濃く投影されていると指摘する³。確かに出世作『墮落百姓』(1775年)をはじめ『父親学校』(1776年)、『わが父の生涯』(1779年)、『父の呪い』(1780年)など、レチフが手がけた作品の多くには作者自身の「父親」や「祖父」が登場する。

そこで大場は、レチフの作品に描かれる「父親」の考察から、専制的で「権威主義的な家父」と、情緒的で「愛情あふれる慈父」という対照的な父親像を提示した⁴。例えば、父親エドムの伝記『わが父の生涯』に登場する祖父ピエールは、「権威と命令によって家族を束ねる家父長制大家族の家長を体現⁵」しているが、エドムのかつての恋人は、家長の権威を感じさせない慈しみ深い父親によって育てられている。前者は、二人の結婚を認めず、絶対的な権力に息子を服従させるが⁶、後者は、許嫁との結婚を強いられるエドムを「わが愛しい息子」と呼び涙を流す。この「涙する情緒的な父親」が近代的な父親を特徴づける要素だと、大場は述べている⁷。また、父子対立の原因を「息子の出立」と「恋

³ 大場静枝、「父と息子をつなぐ物語—『わが父の生涯』から『ムッシュー・ニコラ』へ」、植田祐次編、『近代フランス小説の誕生』、水声社、2017年、103-126頁。

⁴ 大場静枝、「18世紀の小説における父子関係」、『青山フランス文学論集』、復刊12号、青山学院大学フランス文学会、2003年、43-63頁。

⁵ 同上、47頁。実際は困窮により使用人や召使いを雇うことができず、夫婦と一男三女の核家族であった。

⁶ エドムはパリで出会った恋人と別離し、故郷に連れ戻されて父親の決めた許嫁と結婚する。

⁷ 大場は、父親の感情の高まりが子どもを感動させ、父親が信奉する道徳に子どもを引き戻すと指摘し、具体例として、ルソーの書簡体小説『新エロイズ』(1761年)に描かれるデタンジュ男爵と娘ジュリを挙げている(前掲大場「18世紀の小説における父子関係」、56-60頁)。貴族の娘ジュリには身分不相応な平民の恋人がいたが、厳格で専制的な父親が涙する姿を前に、父親の要望を受け入れ許嫁との結婚を決心するのであった。

人の存在」という観点から分析し、その根源が「父権の継承」、つまり息子を同じ価値観を持つ家父長に育て、父権を譲ることにあると論じた⁸。

しかし、ここでいう「父子」とはレチフの父親と祖父を指しており、レチフと父親の関係についてはほとんど検討されていない。そこで本稿は、レチフの自伝『ムッシュー・ニコラ』⁹に描かれる「父親」および「父子関係」の分析から¹⁰、18世紀末のフランス文学作品に表象される父親像の一端を考察することを目的としたい。

分析の対象は、『ムッシュー・ニコラ』の第1期から第3期¹¹までに限定する。当該時期はレチフが父親と過ごした幼少年期にあたり、父親との関係が色濃く反映されていると考えられるからである。また、レチフは『ムッシュー・ニコラ』において、幼少年期をとりわけ「幸福」な時期として描いたとされているが¹²、これは啓蒙思想家ジャン＝ジャック・ルソーの自伝『告白』（1782-89年）

⁸ 大場静枝、「18世紀小説における父子対立の構造—レチフ・ド・ラ・ブルトンスの自伝的作品の分析—」、『青山フランス文学論集』、復刊14号、青山学院大学フランス文学会、2005年、45-62頁。なお、父親は強権を持って息子を指導し、従わなければ勘当する。父親の勘当宣言は「父の呪い」という言葉で表現され、レチフの著作『父の呪い』（1780年）をはじめ、ディドロの戯曲『一家の父』（1758年）や風俗画家グルーズの対画作品『父の呪い：恩知らずの息子』（1777年）および『父の呪い：罰せられた息子』（1778年）など、18世紀フランスを代表する文学作品や芸術作品の主題となっている。

⁹ 『ムッシュー・ニコラ』に関する研究は、自伝でありながら虚実が入り混じるという作品の特異性から、虚と実の弁別、さらには妄想ともいえる架空の逸話や人物を挿入する作者の意図を探る傾向が強い。

¹⁰ 大場は、『ムッシュー・ニコラ』に描かれる父親についても言及しているが、レチフの父親は「ニコラ〔レチフ〕の過ちを許し、その純粋さを信じ、ニコラが無垢な魂を取り戻すために必要とする免罪符を与える役割を担っていた」（大場静枝、「レチフ・ド・ラ・ブルトンス—その自伝に見る真実の概念—」、『青山フランス文学論集』、復刊9号、青山学院大学フランス文学会、2000年、112頁）という重要な指摘をするに留まっている。

¹¹ レチフが17歳になる1751年までの時期にあたる。

¹² 植田祐次、「レティフとルソー、類似、影響、対蹠—二つの自伝をめぐる—」、『青山学院大学文学部紀要』、第17号、青山学院大学文学部、1976年、23-43頁、および石田雄樹、「レチフ・ド・ラ・ブルトンスの文学創造と想像世界—『ムッシュー・ニコラ』における幸福の問題」、植田祐次編、『近代フランス小説の誕生』、水声社、2017年、127-143頁。

における幸福な幼年期と類似している¹³。ルソーは父親と暮らした幼年期¹⁴を幸福に描くことで、自らの諸作品を貫く思想、すなわち「根本原理¹⁵」（人間の本源的善性）を自伝の構図に組み込み、証明しようとした¹⁶。レチフの父親像を分析することにより、ルソーの父親像¹⁷を相対化し、両者の比較から「近代的家族の誕生」に向かう父親像の変遷過程を見出せるのではないだろうか。

1. 二つの自伝：レチフとルソー

1-1. 『ムッシュ・ニコラ』

レチフは1767年に処女作を出版した後、生涯にわたって多くの作品を遺した作家¹⁸である。膨大な作品の多くには作者自身あるいは作者の身近な人物が登場し、時には実名を隠し、虚実を交えながら話が展開されていく。この自伝

¹³ レチフがルソーの影響を受けていることは広く知られており、レチフ自身『ムッシュ・ニコラ』において、ルソーや『告白』について言及している。

¹⁴ 誕生とともに母親を失ったルソーは10歳まで父親に育てられたが、父親の逃亡により一家離散の憂き目にあう。この時、ルソーの幸福な幼年期は終わりを迎える。

¹⁵ 本稿で使用するルソーの作品は全て、プレイヤード版全集（Jean-Jacques Rousseau, *Œuvres complètes de Jean-Jacques Rousseau*, édition publiée sous la direction de Bernard Gagnebin et Marcel Raymond, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1959-1995, 5 vol.）に依拠する。訳出にあたっては、『ルソー全集』全14巻、白水社、1978-1983年を参照した。引用および参照の際はOCと略記して、該当巻数をローマ数字で、ページ数をアラビア数字で示す。よって、この参照箇所はOC IV, p. 935となる。

¹⁶ 拙稿「Évolution de l'image du père au fil de l'écriture des lettres chez Jean-Jacques Rousseau—de la colère à l'admiration à l'égard d'Isaac Rousseau—」、『フランス語フランス文学研究』、第107号、日本フランス語フランス文学会、2015年、3-18頁、および拙稿「ルソーにおける父親像の変遷—「理想的な父親」をめぐる—」、『日本フランス語フランス文学会関東支部論集』、第24号、日本フランス語フランス文学会関東支部、2015年、15-28頁。

¹⁷ 1761年に出版され、瞬く間にベストセラーとなった『新エロイズ』には、専制的かつ暴君的な父親と、子どもの教育に熱心な善良な家長が登場する。この対照的な父親像については、拙稿「善良なる暴君—『新エロイズ』におけるルソーの父親像—」（『フランス文学論集』、第54号、九州フランス文学会・日本フランス語フランス文学会九州支部、2019年、1-15頁）で詳しく論じた。

¹⁸ 現時点で明らかになっている作品の総数は、スラトキン版全集で65作、199巻、全体で61897頁に及ぶ（前掲石田「レチフ・ド・ラ・ブルトヌの文学創造と想像世界」、128頁）。

的要素を散りばめた作風¹⁹が作品の連続性や親和性を感じさせ、後世の研究者によって自伝的作品²⁰が多いと評される謂われである。なかでも特に異彩を放っているのが『ムッシュー・ニコラ』である。本作品は、「私」によって語られる作者自身の人生であり、序文の冒頭で、その執筆意図が宣言されている。

私はあなた方の前に、あなた方と同じ一人の人間の生涯を、その考えや行いについて何も粉飾することなく、全てを差し出そうと企てました。時に私がその心を解剖しようとする人間とは、他ならぬ私自身なのです。[…]
私は自らの内面の感覚に基づいて人間の心を解剖し、自我の深層を探らなければならないからです²¹。

レチフは自身の心を「解剖」し、嘘偽りのない真実の姿をさらけ出すために自伝を書いたのである。それは、タイトル『ムッシュー・ニコラ』に続く「あるいは彼自身によって暴かれた人間の心」という副題からも理解できる。ビエール・テスチュは、レチフにとって「真実」とは「想像世界を現実へ組み入

¹⁹ 19世紀フランスの詩人ジェラルド・ド・ネルヴァルは、1850年に発表した「ニコラの告白」において、「彼は自伝の断片を膨大な作品群の中に撒きちらし、自分をいくつかの変名の下に描いていた」（ジェラルド・ド・ネルヴァル、「ニコラの告白」、中村真一郎・入沢康夫監修、『ネルヴァル全集』、第4巻、筑摩書房、1999年、92頁）と述べている。また、ルポルタージュ風の作品『パリの夜』（1788-94年）は、作者自身の視点で切り取った時代風景（世相）の叙述である。レチフは常に自分の眼に映じたものを文字で記録しようとした作家であるといえよう。

²⁰ 自伝的作品には、自伝のエピソードを演劇化した『人生劇』（1793年）と題する戯曲も含まれている。

²¹ 本稿で使用する『ムッシュー・ニコラ』のテキストは、プレイヤード版（Nicolas-Edme Rétif de La Bretonne, *Monsieur Nicolas*, édition établie par Pierre Testud, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1989, 2 vol.）に依拠する。訳出にあたっては、「ムッシュー・ニコラの幼少時代」、佐分純一訳、『世界文学全集』、第16巻、講談社、1977年を参照した。引用および参照の際はMNと略記して、該当巻数をローマ数字で、ページ数をアラビア数字で示す。よって、この参照箇所はMN I, p. 3となる。

れるためのもの²²」であり、それは「人間の本性に関する真実でもある²³」と定義している。つまり、レチフは「自分」という「人間の心」すなわち「本性」を探求し、そこに繰り広げられる想像世界をも「真実」としてさらけ出そうとしたのである。しかし、自伝という形式をとっている以上、事実から完全に逃れることはできない。この「事実と虚構の結合」こそが『ムッシュー・ニコラ』の特徴であると、テスチュは指摘する²⁴。また、森本淳生は『ムッシュー・ニコラ』を「虚構的自伝」と呼び²⁵、「そこで描かれる「私」は、彼が生きた事実世界の「私」だけではなく、彼が抱いたさまざまな妄想や可能性をも含んだ「私」だった²⁶」と分析する。

レチフは『ムッシュー・ニコラ』の序文において「私の最初の動機は、私自身を物語化することであった²⁷」と述べている。自らの人生を物語のように語ることで、レチフは妄想や願望をさらけ出し、事実と虚構を結びつけ、あったかもしれない人生を「自伝」のなかで生きようとした。これがレチフにとっての「真実」であり、レチフという一人の人間の歴史なのである。

本稿は、このような事実と虚構が混在するレチフの「自伝」を分析の対象とするが、あえて虚実の弁別を慮外に置き、あくまでも一つの作品として捉え、

²² Pierre Testud, *Rétif de La Bretonne et la création littéraire*, Genève, Droz, 1977, p. 90.

²³ *Ibid.*

²⁴ MN I, p. 1142.

²⁵ 森本淳生、「主体、欠如、反復—レチフ・ド・ラ・ブルトンヌ『ムッシュー・ニコラ』と虚構的自伝」、『人文・自然研究』、第7号、一橋大学大学教育研究開発センター、2013年、87-143頁。

²⁶ 同上、99頁。森本は自伝と「虚構作品」に共通するモチーフを詳細に分析し、「レチフ文学の独創性は、実人生を虚構によって変形し、同工異曲の物語を増殖させることで、無意識のうちに潜むこの存在構造を増幅し、読者に対して際だたせて示した点にある。自伝『ムッシュー・ニコラ』が夥しい虚構と反復を含むことには、おそらくこのような積極的な意味がある。」(137頁)と結論づけている。

²⁷ MN I, p. 5. ピエール・アルトマンによると、ここで使用されている「自分自身を物語化する」という動詞 « s'historier » はレチフの造語である (Pierre Hartmann, *Rétif de La Bretonne : Individu et Communauté*, Paris, Desjonquères, 2009, p. 13)。

そこに描き出される父親像に着目する。

それでは、「自伝的作品」ではなく「自伝」を対象とする意味は何か。大場が指摘しているように、「自伝的作品」にも父親像は色濃く投影されている。しかし、そこには作家として客観的な視点からの観察、あるいは伝聞によって作り上げられた父親像が反映されている可能性がある。一方、「自伝」という体裁であれば、レチフが実際に接した父親、すなわち主観的な父親像と直接的な人間関係を基に「真実」が描かれていると考えられる。レチフにとって、父親とはどのような存在だったのか。自伝『ムッシュー・ニコラ』の考察からレチフの父親像を検討したい。

1-2. 筆名とタイトル

ニコラ＝エドム・レチフ・ド・ラ・ブルトンヌという筆名は、父親が家屋とともに購入した農牧地に由来している。

8歳になった時、父は、私の種違いの兄ブジャが持ち主だったポルト・ラ＝バの家を去って、小作人のいるラ・ブルトンヌへ移り住んだ²⁸。

本名に添えられた地名は、作家としてデビューしたバリでも、生まれ故郷のサシーでもなく、その村の集落から離れた農牧地ラ・ブルトンヌであった。父親はサシーで二度結婚しており²⁹、レチフには異母兄姉³⁰がいたが、多くは独立し、ラ・ブルトンヌでは二人の異母姉と両親、そして弟妹たちと暮らしていた。

²⁸ MN I, p. 42. レチフの両親はともに再婚で、それぞれに子どもがいた。ブジャはレチフの母親が亡夫との間にもうけた子で、この時すでに独立していた。

²⁹ *Ibid.*, p. 19.

³⁰ レチフの父親は、前妻との間に七人の子どもがいた。後妻との間にも同じく七人の子どもを授かるが、レチフはその長男として生まれた。

農牧地の自然に感動し、絶対的な孤独にひたり、自由を謳歌した³¹ レチフは幸福であった。

私は人目を避けてただ一人、自由で勝手気ままに自分のしたいことができるようになった。私という人間を理解するには、そうした喜びを感じ取れる感受性を持つことが必要なのだ。私の生活感情は膨らみ、暮らしの幅ができ、自由に酔いしれたのである³²。

新しい暮らしのなかで自由を手に入れたレチフは、喜びに満ち、感情があふれ、感受性の豊かな人間になっていく。「私」を理解し、「私」という「人間の心」を解剖し、「自我の深層」を探るためには、ラ・ブルトンヌで培われた感受性が必要だったのである。レチフは、ここに「私」の原点を見出し、筆名にラ・ブルトンヌの地名を添えたのだらう。

また、父親の人望が厚かったことも、レチフにとって居心地の良い環境になっていたはずである。

近郷の農民たちは日曜日ごとにやって来て、些細な揉めごとを父の仲裁に委ねていた。というのも、エドム・レチフは小さな裁判所の判事代理であったが、誠実だという素晴らしい評判によって、周囲六、七里にわたる郡全体の治安判事になっていたからである³³。

近郷の農民たちから頼りにされ、父親は判事代理、さらには治安判事という責任ある役職を務めていた。毎週のように農夫の相談に乗り、揉めごとが起こ

³¹ MN I, pp. 70-71.

³² *Ibid.*, p. 71.

³³ *Ibid.*, p. 81.

れば仲裁役を引き受ける律儀で誠実な性格は、近隣の村々で評判になる程であった。村人たちはエドムを尊敬し、その眼差しは彼の息子にも向けられた。そして敬意を込めて、レチフを「ムッシュー・ニコラ³⁴」（ニコラ坊っちゃん³⁵）と呼んだのである。それは、エドムが所有する農地の小作人も同様であった。

あなたはニコラ坊っちゃんなのですから、ご身分相応のことをなさってください³⁶。

レチフ家の小作人は、主人を敬い、村人と同じようにその息子にも敬意を払った。農家といえども、小作人を雇える程の広大な土地を所有する豊かな生活のなかで、人格者として尊敬され慕われる名士の息子という立場をレチフは獲得したのである。筆名に添えられたラ・ブルトンヌという場所は、レチフにとって幸せの象徴だったに違いない。誇らしい父親の面影とともによみがえる幸福な時間のなかで、レチフは『ムッシュー・ニコラ』³⁷に身を投じたのである。

³⁴ *Ibid.*, p. 79.

³⁵ 「ムッシュー」« Monsieur » は、男性に対して使用される敬称である。古くは貴族階級やブルジョワ階級など一定の社会階層に属する男性に対して使用されていたが、18世紀には召使いが「家の主人」に対して呼びかける際にも使われていた（*Dictionnaire universel françois et latin, vulgairement appelé Dictionnaire de Trévoux*, Paris, Compagnie des Libraires Associés, 1771, t. VI, p. 41）。通常、子どもには使用しない敬称だが、ここではエドムに対する敬意がレチフにも向けられ、「ニコラ坊っちゃん」のような意味合いで使用されていたと考えられる。

³⁶ *MNI*, p. 79.

³⁷ レチフが残した日記「私の落書き」によると、当初、自伝のタイトルは「ムッシュー・ニコラ」« Monsieur Nicolas »ではなく「コンペール・ニコラ」« Compère Nicolas »であった（Nicolas-Edme Rétif de La Bretonne, *Mes inscriptions : journal intime de Restif de La Bretonne (1780-1787)*, publié d'après le manuscrit autographe de la Bibliothèque de l'Arsenal, avec préface, notes et index par Paul Cottin, Paris, Plon, 1889, p. 80）。« compère »という語彙には「代父」や「仲間」という意味があるが、その他にも親しみを込めて「相棒」や「大将」などの意味で使用されることがある（*Dictionnaire universel françois et latin, vulgairement appelé Dictionnaire de Trévoux*, op.cit., t. II, p. 744）。レチフが『ムッシュー・ニコラ』に添えた「私への献辞」は、「親愛なる私へ」という呼びかけの言葉で始まり、もう一人の「私」である「あなた」に贈られている。また、「あなたは私にとって最良の友人だ」という言葉からは、「あなた」

1-3. 『告白』への視線

18世紀の自伝として必ず名前が挙がる作品といえば、ルソーの『告白』である。レチフが作家活動を始めた頃³⁸、『新エロイズ』(1761年)によってベストセラー作家となっていたルソーは、自伝を執筆していた³⁹。『告白』はルソーの死後、1782年に出版⁴⁰されるが、レチフが自伝の執筆に取りかかる頃には、無視することのできない作品となっていた。それは、『ムッシュー・ニコラ』に添えられた「私への献辞」からも読み取ることができる。

ジャン＝ジャック・ルソーが偉大な人物を解剖したように、私は普通の人間を解剖するつもりです。私は彼を盲目的に模倣しようとは思っていません。この作品を私に思いつかせてくれたのは彼ではなく、私が自分で思いついたのです⁴¹。

レチフは、ルソーのような「偉大な人物」ではなく、ともすれば歴史のなかに埋もれてしまうような「普通の人間」の自伝を世に出す、という新奇性および独自性を主張しているが、それこそがルソーを強く意識していた何よりの証拠である。

自伝をめぐるレチフとルソーの関係については、植田祐次⁴²と石田雄樹⁴³が興味深い考察を行っている。植田はフランスにおけるレチフ研究を参照しながら

を「私」の「相棒」と捉えていたことが理解できる。さらに、レチフはこの献辞で「私が『ムッシュー・ニコラ』だ」と宣言しており、幼少年期の呼び名に対する執着にも近い愛着が感じられる(Nicolas-Edme Rétif de La Bretonne, « *Dédicace à moi* » in *MN* II, pp. 1009-1010)。

³⁸ レチフは1767年に印刷工を辞めて、本格的に作家活動を始めた。

³⁹ 1764年から翌年にかけて執筆が開始された。

⁴⁰ 1782年に第1部、1789年に第2部が出版された。

⁴¹ Nicolas-Edme Rétif de La Bretonne, « *Dédicace à moi* » in *MN* II, p. 1010.

⁴² 前掲植田「レチフとルソー、類似、影響、対蹠」。

⁴³ 前掲石田「レチフ・ド・ラ・ブルトンスの文学創造と想像世界」。

ら、レチフと『告白』の関係について詳細に論じている。植田によれば、『ムッシュ・ニコラ』の執筆は1780年あるいは1783年に開始されるが、『告白』は1770年頃に朗読会が開催され、部分的ではあっても内容が出版前に公開されており、レチフがルソーの影響を受けている可能性は否定できない。そして植田は、『ムッシュ・ニコラ』における幼少年期の記述、特に自然描写から、レチフが自然との触れ合いを、その後味わたどの享楽よりも純粋で完全なものとして回想していることを指摘し、それは失われてしまった幼少年期の純真に対する限りない哀惜の表れであると論じている⁴⁴。

一方、「文学が幸福という問題に関して担うことのできる役割⁴⁵」を追究する石田は、「想像世界」⁴⁶をキーワードに、レチフがいかに文学によって幸福を実現したのかを論じている。石田によれば、『ムッシュ・ニコラ』における幼少年期の描写にこそ、レチフの幸福像が最も鮮明に表れている。「子ども時代を人生において最も幸福な時期だと回想する⁴⁷」レチフにとって、幸福とは自伝執筆時の不幸と対照的な、失われてしまった子ども時代の純粋さに存在するものなのである⁴⁸。そして石田は、ノスタルジーが幸福な思い出をますます美化する傾向にあると指摘した上で、「子ども時代から遠ざかれば、人は幸福をもたらす無垢を喪失してしまう⁴⁹」という、レチフの主張を読み取っている。

純真無垢という幸福な状態よ！そこでは未熟で蒙昧な人間は死というもの

⁴⁴ 前掲植田「レチフとルソー、類似、影響、対蹠」、37-38頁。植田は、レチフの自然美体験が幼少年期に限られていることを指摘し、ルソーとの違いを見出している。

⁴⁵ 前掲石田「レチフ・ド・ラ・ブルトンヌの文学創造と想像世界」、128頁。

⁴⁶ レチフの自伝には虚実が入り混じり、その真実性に疑義を生じさせているが、石田によれば、『ムッシュ・ニコラ』における「真実」とは客観的な証拠や指標に基づくものではない。あくまで個人的な次元に留まり、レチフにとっては想像力、つまり「想像世界」もまた真実なのである。同上、130-135頁。

⁴⁷ 同上、133頁。

⁴⁸ 同上、135頁。

⁴⁹ 同上、138頁。

を知らなかったし、あるいは動物のように避けるべき目の前の死しか知らなかった！…森を懐かしむのは正しかったのだ、ジャン＝ジャックよ！
そう、人は蒙を啓くにつれ、全てを失ったのだ！⁵⁰

「純真無垢という幸福な状態」は、啓蒙されることにより失われていく。『ムッシュー・ニコラ』におけるレチフの主張は、『学問芸術論』（1750年）をはじめとするルソーの諸作品を貫く思想、すなわち「人間は善良に生まれるが、社会に接することで悪徳に染まり堕落する」という「根本原理」を彷彿とさせるものであった。

2. 『ムッシュー・ニコラ』における父親像

2-1. 善良な父親と尊敬される家長

『ムッシュー・ニコラ』は、作者自身の出生と、それにまつわる父親の結婚話によって幕を開ける。

父は二度結婚した。初婚ではマリー・ドンデヌとの間に七人の子どもを、再婚ではバルブ・フェルレ＝ド＝ベルトロとの間に同じく七人の子どもがいて、私はその長男である⁵¹。

そしてレチフは、両親の人柄について話を続ける。

母は、鋭い頭脳と親切な心と美しい身体とを兼ね備えていた。[…] 激し過ぎるくらい快活だったが、自制する術をわきまえていて、優しく親切で、人を裏切ったことがなかった。父もやはり自身の向上に努め、短気で

⁵⁰ MN I, p. 15.

⁵¹ *Ibid.*, p. 19.

いながら表面はこの上なく穏やかな男であった。それでいて仕事とか、人助けになることには何でも熱心だった⁵²。

賢く快活で、親切な心を持ち、周囲からも好かれる母親と、向上心があり、仕事や人助けに熱心で、穏やかな父親にレチフは育まれた。自慢の両親の許で過ごす幼少年期は、レチフにとって幸福の象徴だったに違いない。当時一緒に暮らしていた異母姉⁵³も、「女性たちへの信頼が絶対的であった⁵⁴」レチフにとって善良な人物に他ならなかった。

女性たちは、およそ私に害を及ぼすようなことはしない、自分たちにできる限りの善を施してくれる素晴らしい人間だという風に見ていた。男性たちについては、父だけを例外として正反対の観念を抱き、彼らは冷酷で厳格で皮肉っぽい、意地の悪いやつらだとみなしていたので怖かった⁵⁵。

これはレチフが4歳の時の回想だが、母親を含む女性たちは「できる限りの善を施してくれる素晴らしい」存在であり、父親も男性のなかで唯一、レチフを傷つけることのない善良な人物として描かれている。レチフを取り囲む環境は善に満ちていた。さらに、両親のことを「完全無欠な神⁵⁶」と表現するところに、このような地上の楽園を与えてくれた両親に対する偽らざる思いを見出すことができる。

レチフが8歳になると、一家はラ・ブルトンヌへ転居する。何度か村を出て

⁵² *Ibid.*, p. 20.

⁵³ 腹違いの兄姉七人（兄二人、姉五人）のうち兄は皆、神学校に通っていた。姉は上の三人が結婚し、四女と五女がレチフと一緒に暮らしていた。いずれにせよ、牧童や小作人を除いて、家庭内で男性は父親だけだった。

⁵⁴ *MN* I, p. 27.

⁵⁵ *Ibid.*, p. 28.

⁵⁶ *Ibid.*, p. 34.

生活することはあったものの、レチフは17歳になるまで両親の許で暮らした。成長とともに客観的な視点から父親を観察するようになったレチフは、父親に対する周囲の評判を理解するようになる⁵⁷。父親は親族からも尊敬されていた。レチフは父親の故郷を訪れた際、それを目の当たりにするのであった。

一族は、父との別れが自分の父親と別れるような有様であったが、それは皆が父を家長と仰ぎ、また、父がサシーに在住していることが一同には悲しみの種だったからである⁵⁸。

父親は、祖父ピエールが命じた結婚により生まれ故郷のニトリーを離れ、近隣のサシー村に移住し、再婚後も同村で暮らしていた。父親が帰省すると親族は皆「家長」と慕い、別れを惜しむのであった。このようにレチフは父親を、家族にとっては「善良な人物」として、また親族からは「尊敬される家長」として描いたのである。

2-2. 許す父親

ルソーが書簡体小説『新エロイズ』において描いた理想的な家族には、「善良な家長」が登場する。主人公ジュリの夫ヴォルマルである⁵⁹。彼はジュリとともに子どもの教育方針を立て、実行し、外部からの悪徳の侵入を防ぎながら家庭を善良に保つという役割を担っていた。

また自伝『告白』では、父親は息子を愛し、ともに読書し⁶⁰、愛国心を息子に継承した存在として描かれている⁶¹。ルソーは、幸福な家庭において愛情を注

⁵⁷ 第1章第2節参照。

⁵⁸ *MNI*, p. 112.

⁵⁹ 前掲拙稿「善良なる暴君」参照。

⁶⁰ 父親との読書だけが、ルソーが幼年期に受けた教育であった。

⁶¹ ルソーは『告白』において幸福な幼年期を描くために父子関係を美化していた。前掲

しながら熱心に子どもを教育する父親を理想としたのである。

それでは、レチフと父親はどのような関係にあったのか。まずは、『ムッシュ・ニコラ』に描かれる父親の愛情と教育に焦点を当てて検討してみたい。

レチフはルソーと同様に、幼少年期における父親との微笑ましい読書経験を書き留めている⁶²。

私には心を満たす興味の対象があと二つあった。一つは『クリスマス賛歌集』を自分の目で見ることだった。父は待降節の夜にそれを歌ってくれたが、抜かしたものが沢山あったので、私は是非知りたいと願っていた。もう一つは『青表紙騎士物語』であった。父は私たちを読書に親しませようとして、それらのおとぎ話を褒めちぎるという手を使い、[...] なかでも小さな帽子の『フォルトゥナトゥス』の話には一番聞き惚れた。私は半ば口を開け、父の口に耳目を傾けて想いを走らせなければならなかったが、嬉しきでわくわくする以外は、身動きもしなかった⁶³。

幼いレチフは父親との読書に胸を躍らせ、夢中になった。そして、読書に没頭するレチフの好奇心をさらに掻き立て、才能を開花させたのが聖書である。聖書の熟読もまた、父親との共同作業であった。「素晴らしい記憶の力を借りて貪り読み、父が読んで解説を加えてくれたことがすっかり呑み込めるようになってきた⁶⁴」と述べているように、レチフは父親が読み聞かせてくれる聖書を暗記し、その記憶と父親の解説を頼りに内容を理解できるようになったのである。

拙稿「Évolution de l'image du père au fil de l'écriture des lettres chez Jean-Jacques Rousseau」参照。

⁶² レチフは学校に通っていたため、ルソーとは異なり、父親との読書だけが幼少年期に受けた教育というわけではなかった。

⁶³ *MNI*, p. 83.

⁶⁴ *Ibid.*, p. 82.

レチフの記憶力と理解力は家族を驚かせ、それは近隣の村々でも評判になる程であった。父親は、息子にはこのまま家業を継がせるのではなく、勉強をさせたいと思うようになる⁶⁵。そして、聖職者になっていた前妻の息子たちにレチフを預け、神学校で本格的に勉強させることにしたのである。長男エドム＝ニコラはクルジという町の主任司祭になり、次男トマは神父として兄の助手を務めていた。父親の決意⁶⁶は、レチフに対する確信と信頼に基づくものであった。

父と母は、私が才気と善良な心とを備えていると確信していて、将来都会に住んでも、自分の清廉潔白なところを保っていくことを疑わなかった。彼らは、私がいずれは出世するものと思い、後添いの長男であるだけに、私を弟妹の保護者に仕立てるためには、何ごとも惜しんではならないと思っていたのである⁶⁷。

両親の期待を一身に受けて、レチフの寄宿生活が始まった。しかし長くは続かなかった。レチフは理想の少女に出会ったことを機に欲望が抑えられなくなり、何人もの女性を娶る破廉恥な詩を認め、生来の好色な性格が露呈してしまう。さらに、神学以外の勉強を快く思わない兄たちを批判した手紙も露見して、ついに追い出されることになってしまった。レチフの不祥事により息子たちから呼び出された父親は、恥を忍んで駆けつけた。

⁶⁵ 父親は牧童の前で「息子のニコラを町へやるぞ。よく勉強するから知恵がつくだろう。」(*ibid.*, p. 79) と述べており、親戚に息子の将来を相談した際にも、「勉強させてやろう。[...]その上で、この子の適当な身の振り方がわかるだろう。根は勉強に向いているのだ。」(*ibid.*, pp. 135-136) と話している。

⁶⁶ 「トマ神父は父の切なる願いに応え、さらに長兄の意見もあって私を引き取ることを承諾していた」(*ibid.*, p. 136) という記述からも、父親の強い意志を読み取ることができる。

⁶⁷ *Ibid.*, p. 142.

お前たちの弟が勉強の道へ進まない場合は、私の身分の方が好ましいのだが、それにしてもいくらか人よりましな仕事をして、しかも私自身がそうしているように、金になるよりも名誉になる地位に就くことができるようになるには、教育を受ける必要がある。だから、あの子を仕込んでやってくれ⁶⁸。

恥をかかされたにもかかわらず、父親は息子たちに頭を下げ、レチフの将来のために教育を与えて欲しいと頼んだ。ここに、子どもに愛情を注ぎ、教育を与えようとする父親の姿が見て取れる。父親はレチフの過ちを許し、再び勉強をさせようと奔走するのであった。しかし、今度はオセールの司教⁶⁹に反対され、父親の願いは頓挫してしまう。それでも息子を農家以外の職業に就かせたかった父親は、レチフを印刷工の許へ徒弟奉公に出すことにしたのである。

私は、お前を田舎に埋もれさせるつもりはないのだ。[……] わが息子ニコラよ、過ぎた過ちは咎めない。その苦しみはお前が背負っているのだ。私は決して、人が苦しい思いをしていることをとやかく言いはしない。兄さんたちも、お前に過ちがなければ勉強の道に進ませていたのだ。[……] 私の意向は、お前がこのまま畑仕事をするのではなく、見習いに出すことなのだ。[……] 立派な職業だから、お前が勉強したことは無駄にはなるまい⁷⁰。

⁶⁸ *Ibid.*, p. 267.

⁶⁹ 同地方の最上位の聖職者。

⁷⁰ *MN I*, pp. 290-291.

息子を田舎に埋もれさせることなく、町に出して勉強をさせてやりたいという父親の望みは、息子自身の過ちによって閉ざされてしまった。それでも父親は息子の過ちを許し、「立派な職業」に就けるよう道を模索するのであった。

この「許す父親」は、大場が指摘するように⁷¹、レチフが提示する父親像の特徴であり、ルソーの作品には見られないレチフ独自の父親像といえよう。

2-3. 家長から父親へ

サシー村のラ・ブルトヌ地区で農業を営んでいたレチフ一家は、両親を筆頭にレチフを含む七人の子どもたちと、父親の連れ子二人から成る、いわば核家族であった。前述したように、父親エドムは周囲から尊敬され、息子のレチフは「ニコラ坊っちゃん」と呼ばれて幸福な幼少年期を過ごしていた。父親は息子に愛情を注ぎ、教育熱心であった。そして息子が過ちを犯した時には「許す父親」であった。しかし、同じ過ちを繰り返さないように子どもを諭すことも父親の役割である。エドムは苦言を呈しながらも、息子を優しくたしなめるのであった。

私は家長としてではなく、父親として、友人としてお前に話をしている。
こうしてお前は大きくなって、道理がわかるのだから⁷²。

息子を諭す言葉のなかに、「家長」と「父親」という二つの行動理念が存在し、エドムがそれらを自覚的に選択し、使い分けていることが確認できる。さらに「父親」と「友人」を同格に置き、自身が「家族を率いる家父長的な父親」とは対極の存在であることを示している。これは、ルソーが『社会契約論』（1762

⁷¹ 前掲大場「父と息子をつなぐ物語」、119-120 頁。

⁷² *MN* I, p. 293.

年）において定義してみせた、家族における父権のあり方⁷³に通じている。

あらゆる社会のなかで、最も古く、そして唯一の自然な社会は、家族という社会である。子どもは、自己を保存するために父親を必要とする間だけ父親に結びつけられている。その必要がなくなるや否や、この自然の絆は解ける。子どもは父親に服従する義務を免れ、父親も子どもの世話をする義務を免れて、両者は等しく独立の状態に戻る。もし、彼らが引き続き結合したままであるなら、それはもはや自然にそうになっているのではなく、意志によってそうになっているのである⁷⁴。

ルソーによれば、父権という「自然の絆」は子どもの成長とともに解け、父親と子どもは独立した対等な関係となる。親許を離れ、町へ出て印刷工という職に就こうとするレチフを、父親は対等な関係とみなしたのであろう⁷⁵。

しかし「お前は大きくなって、道理がわかるのだから」という言葉が示しているように、子どもが道理のわかる年齢に達していない場合や、分別のない行動を取った場合には、父親は「家長」として振る舞うのだろう。「家長」として息子の前に立つエドムの念頭には、権威と命令で家族を束ねる自身の父親ビエールの姿が浮かんでいるはずである。そして、息子が「家長」の命令に従わない時には、威厳を持って権力が行使されることになる。

ところが、レチフが父親に「家長」として命じられたり、権力を行使された経験は『ムッシュー・ニコラ』に描かれていない。父親は「家長」という立場を認識しながらも、レチフに父権を振るうことはなかった。

⁷³ 拙稿「ルソーにおける家族像—『新エロイズ』にみる理想の家族の崩壊をめぐる—」、『福岡大学人文論叢』、第 51 巻第 4 号、福岡大学研究推進部、2020 年、1021-1046 頁。

⁷⁴ OC III, p. 352.

⁷⁵ 成長した子どもと父親が家族として結びつくにあたって、エドムは友情という新たな絆を結ぼうとしたのだろう。

一方、レチフは別の人物のなかに権威を振りかざす「家長的な存在」を見ていた。異母兄のエドム＝ニコラとトマである。前述したように、幼い頃レチフは、父親以外の男性は皆、自分に害を及ぼすことのある意地の悪い人物だと恐れていた。そして、その象徴的な例として、歳の離れた異母兄を挙げている。

当時神学生だった二人の兄が、ジャンセニストの厳格さで私を縮み上がらせるのだった⁷⁶。

レチフは厳格な異母兄たちを恐れていた。そして彼らの信仰や教義に疑念を抱くようになる。恩寵における神の力を信奉し、人間の自由意志を軽視するジャンセニストについて、「彼らは俗事と称する学問を目の仇にして、ひたすら宗教を学び知ることだけが眼目である⁷⁷」と述べ、彼らの反学問的な立場を問題視するのであった。兄弟間の確執が深まっていく。レチフは長兄を「家へ来る度に、痛い目にあわせて原罪を拭い去ってやろうと私を鞭でたたいた⁷⁸」人物として特に敬遠していた。

前節で論じたように、父親はレチフに教育を与えようと奔走していた。そして、聖職者となった息子たちにレチフを託したのである⁷⁹。しかし父親の想いは裏腹に、息子たちは、レチフが神学校に通いながら基礎教育としてラテン語などを学ぶことを快く思っていなかった。父親に頼まれたがゆえに、止むを得ず黙認していたのである⁸⁰。

⁷⁶ *MNI*, p. 28.

⁷⁷ *Ibid.*, p. 192. 学問に励んだところで、神の恩寵に浴することはできないと考えるためである。

⁷⁸ *Ibid.*, p. 56. この記述の後、レチフは「神学生ほど能がないものはいないし、将来、人の期待に沿う、識見豊かな神の僕となるにふさわしからぬものはいない」(*ibid.*)と述べ、兄の理不尽な仕打ちに対する恨み言から、神学生全般に向けた誹謗にまで話を発展させている。

⁷⁹ 長兄エドム＝ニコラはクルジの主任司祭となり、次兄トマがその補佐をしていた。

⁸⁰ レチフは、「勉強したのは私ばかりで、それも父がそう仕向けたからである。トマ神

勉強熱心なレチフに感化され、ラテン語を学びたいと訴える学友が現れた際には、司祭だった長兄が「ラテン語の勉強は救いには無用なものだ⁸¹」と言って退けた。それでもレチフには許されていると主張して諦めようとしないうちに、今度は「私が目を瞑ったのは、肉親に対する敬意からだ。[…] ニコラの救いについては大いに憂慮しているのだ！⁸²」と言い放つのであった。尊敬する父親のたつての頼みゆえに我慢を強いられていた息子たちは、レチフが不祥事を起こすや否や直ちに勉強を止めさせる決断を下し、兄弟間の軋轢は増すばかりであった。

レチフに対する異母兄たちの厳格な態度は、宗教的背景以外にも理由があった。父親の再婚である。異母兄たちが尊敬する父親は、あくまで亡き母親の夫なのであった⁸³。その想いは父親も十分理解していた。レチフが破廉恥な詩を書いて呼び出された際、父親はやり切れない気持ちを不肖の息子にぶつけている。

お母さんの驚きと悲しみはどんなものだろうか。私と同じように驚き苦しむことだろう！…気の毒にお母さんは、お前が学問の力による以上に自分の才覚で、前妻の男の子たちに追いつくの心を当てにしていたのだが、せいぜいその期待を削いでしまうがいい！…オセールで二人の兄さんが勉強していた頃は、私が呼ばれそんな破廉恥な振舞いを申し渡されたためしはなかったよ。その父親たる私は、お前の親であることを二人の前で恥じ入ったぞ！…お陰でこっちまで恥をかいたような気がしたよ！…二人の目

父は不本意ながら教えてくれたに過ぎない。」(MN I, p. 192) と回想している。

⁸¹ *Ibid.*, p. 206.

⁸² *Ibid.*, pp. 206-207. ここでレチフは、「クルジの司祭はルソーを知らないのに […] ギリシア語とラテン語の学習について、あの首尾一貫しない作家と同じ主義主張を持っていた」(*ibid.*, p. 206) と、ルソーの名を批判的に持ち出している。

⁸³ 例えば、レチフはトマ神父のことを「彼は、バルブ・フェルレ [後妻] の子どもたちを好まず、彼らを辱しめることに興を覚えた」(*ibid.*, p. 150) と述べている。

つきと驚く様子で、再婚したことを咎めているのがわかった。前の子どもたちはかねがねそれを非難しているし、今となってはお前のような子どもができた以上、非難されても仕方がない…。お前は自分の書いたものと行状とで、今しがた父親を赤面させたところだからな…⁸⁴。

前妻の子どもたちは、以前から父親の再婚を非難していた。そして今回の不祥事で、彼らの正しさが証明されたというのである。おそらく、再婚相手にも不祥事の原因の一端があると追及されたのだろう⁸⁵。レチフの母親は、前妻の子どもたちに遠慮しながらも⁸⁶、自分の血を分けた子どもが彼らに追いつき追い越すことを願っていた。そのことを承知している父親は苦悩していたはずである。彼には父親として守るべき後妻との家族がある。しかし、再婚を快く思わない前妻の子どもたちもまた家族であり、彼らの手前、レチフやその弟妹たちを優遇するわけにもいかない。前妻との死別と再婚によって、父親エドムは二つの家族の長となったのである。これは、一つの家族のなかに複数の世帯が存在する大家族のような、いわば擬似的複合家族の長となったことを意味している。エドムは、複合家族全体を率いる「家長」としての威厳と振る舞いが求められる一方で、後妻とその子どもたちから成る新しい家族の前では、愛情を注ぎながら熱心に子どもを教育し、時には優しくたしなめる「許す父親」であった。エドムのなかに「家長」と「父親」の対照的な行動理念が存在し、それらを自覚的に使い分けるに至った経緯は、再婚の産物なのであった。

不祥事後、勉強を封じられて茫然自失していたレチフは、十字架礼拝を忘

⁸⁴ *Ibid.*, p. 261.

⁸⁵ 父親は「お前の墮落は、それが持って生まれたものと思えるだけに、ますます驚いてしまうよ！」(*ibid.*)とも述べている。後妻の責任を前妻の子どもから詰られた可能性がある。

⁸⁶ レチフは「母自身も私に甘い顔を見せまいとして、義母である手前、私のことでは大きい娘たちの説に反対したことは決してなかったのである」(*ibid.*, p. 144) と述べている。

れてしまう。異母兄に叱責され、ついに激情をぶつける。

お二人とも僕のことを悪く思っていらっしゃるとわかりました。そちらが憎んでいらっしゃるのと同じくらい、こちらはこちらで憎いと思っていますから、僕の過ちは全て、お二人のせいにしても罰は当たりません⁸⁷。

この宣戦布告によって両者の確執は決定的となった。レチフは父親の許へ帰されることになる。迎えに来た父親は、異母兄たちの前では複合家族を率いる「家長」として厳格に振る舞うのであった。

彼〔父〕は、兄たちの前では私に冷たい口の利き方をし、次いで三人とも司祭の部屋に引きこもった⁸⁸。

不祥事を起こし、異母兄たちとの問題が絶えないレチフを前に、「許す父親」は厳格であろうとした。前妻の子どもたちの前では、「家長」という行動理念が優先する。このように、父親は「家長」と「父親」の二つの顔を使い分けるのであった。

レチフが親許に戻ってしばらくすると、奉公先が決まった。父親はレチフに勉強を続けさせたいという願いは諦めたものの、村で職を得させるべきだという前妻の息子たちの意見を聞き入れることもなかった。レチフを送り出す父親の言葉には、「家長」と「父親」のせめぎ合いを見出すことができる。

前妻の子どもたちの考え方が、後妻の子どもたちに不利な場合、私がそれに従う必要があるのだろうか。いや、それは違う。私はお前たち皆を愛し

⁸⁷ *Ibid.*, pp. 275-276.

⁸⁸ *Ibid.*, p. 286.

ているし、皆の父親なのだ⁸⁹。

エドムは、前妻の子どもたちの意見に従うのではなく、あくまでレチフの「父親」として、彼の将来を考え、判断を下すべきだと述べている。複合家族の「家長」として、前妻の子どもたちも、後妻の子どもたちも、平等に愛しているとすぐに言葉をつけ加えているが、「父親」として新しい家族を優先するという本音が思わず口をついて出てしまったといえよう。「家長」と「父親」のどちらを優先すべきか。エドムの答えは、いうまでもなく「父親」だったのである。

おわりに

大衆作家ニコラ＝エドム・レチフ・ド・ラ・ブルトンヌが遺した多くの自伝的作品には、作者自身あるいは作者の身近な人物が登場する。虚実を交えながら展開される作品のなかで、彼らは時に実名を隠しながら、あったかもしれない人生を生き直す。それは『ムッシュー・ニコラ』においても同様だった。しかし、幼少年期のレチフは違っていた。両親と暮らしたラ・ブルトンヌでの幸福な時間が、他の作品で描き直されることはなかったのである⁹⁰。あったかもしれない別の人生を想像する必要がない程、幼少年期のレチフは満たされていたのであろう。レチフに幸福を与え、それを維持してくれたのは両親であり、とりわけ家族を率いる父親であった。

『ムッシュー・ニコラ』は自伝であるがゆえに、父親エドムとの直接的な関係から生じる父親像が描き出されていた。それは、「父親」としての行動理念と「家長」としての行動理念をあわせ持ち、両者を使い分け、時ににそれらの

⁸⁹ *Ibid.*, p. 290.

⁹⁰ 前掲植田「レチフとルソー、類似、影響、対蹠」、35頁。植田はこの特殊な事例を、ルソーの自伝『告白』に描かれる幸福な幼年期の影響であると推測している。

板挟みとなる父親像であった。前者は、子どもに愛情を注ぎ熱心に教育をする、いわばルソーが『新エロイズ』において描いた理想の父親像に、「許す父親」というレチフ独自の父親像が加わったものである。一方後者は、レチフの祖父ピエールのように父権を行使し、権威と命令で家族を束ねる「家長」ではなく、前妻の子どもと後妻の子どもを分け隔てなく平等に扱おうと努める、疑似的複合家族の長である。そして両者の狭間で揺れ動きながらも、本心では前者を優先してしまう「父親」としてのエドムの姿を確認することができた。

このように、レチフの父親には祖父のような家父長的な印象はなく、「家長」としての振る舞いも、再婚という状況が生んだものであった。18世紀末に描かれたレチフの父親像は、家父長制から離れ、ルソーの理想を体現したような、近代的な父親像に近づいたものといえるだろう。

付記：本研究は JSPS 科研費 JP18K12347 の助成を受けたものである。